

吉備児島と神武天皇聖跡高嶋宮伝説地の考察

丸谷憲二

1 はじめに

『古事記』（712 年成立）の国産みにおいて、イザナギ・イザナミが大八洲を産んだ後、児嶋、小豆島（あづきしま）、大島、女島、知訶島（ちかのしま）、両児島（ふたごのしま）を産む。『日本書紀』（720 年成立）には吉備子洲（きびのこじま）、子洲（こしま）とある。何故、国産み神話に児嶋が収録されたのかを考察したい。

2 国産み神話に何故、吉備児嶋が選ばれたのか

『古事記』の「然後還坐之時」に注目したい。知訶島（ちかのしま）が五島列島である。福江島を大知訶（おおぢか）と呼び、上五島の島を「こぢか」と呼んでいた。五島列島の北に小値賀島（おぢかしま）がある。最後の両児島は五島の南西に浮かぶ男女群島説がある。

小豆島と児嶋が黄蕨（吉備）国に属し、知訶島が五島列島である。つまり、黄蕨国から五島列島の間を意味している。黄蕨国のみが小豆島と児嶋の 2 島収録されている。大和政権にとって瀬戸内海と吉備の穴海が最も重要な場所であったことを意味している。

謂大八嶋國。然後還坐之時。生吉備児嶋。亦名謂建日方別。次生小豆嶋。亦名謂大野手（上）比賣。次生大嶋。亦名謂大多麻（上）流別【自多至流以音】次生女嶋。亦名謂天一根【訓天如天】次生知訶嶋。亦名謂天之忍男。次生兩児嶋。亦名謂天兩屋。【自吉備児嶋至天兩屋嶋并六嶋】

2.1 亦名謂建日方別とは

吉備児島の亦名が建日方別（たけひかたわけ）とあり意味不明である。解読に挑戦した 5 説を紹介したい。金甲山頂の郡神社の旧址と国津神社の調査が必要である。

① 山崎多喜男説 昭和 50 年

「児島には建日方別を統治指導者に置いた」ことです。

② 池田潤説 平成 23 年

吉備児島は、ほぼ北緯 34 度 30 分に位置し、神武天皇が橿原宮を築いた「六合（くに）の中心（もなか）」である大和の畝傍山（うねびやま）の真西に位置している。そのことは、この島の別名である建日方別（たけひかたわけ）の中に「日方（ひかた）」と記されていることから明らかである。かつて、神武天皇が東征の時に立ち寄った筑紫国の岡水門（おかのみなと）を詠んだ万葉歌に、その場所を「日方吹くらし」と歌っていた。この日方は太陽の方向から吹いてくる風を意味していたが、建日方別の日方はむしろ、その文字通り太陽の方向を言うのであろう。まさにここは「六合（くに）の中心（もなか）」である大和の畝傍山からは、春分や秋分の特別な夕日が沈んでいく方向に当たる。

③ 藤井駿説 昭和 48 年

吉備津神社の岩山宮は建日方別を祀る。社伝では岩山宮は、「児島の国魂（くにたま）」を祀ると伝え、神体も巨巖であるという。おそらく吉備の磐座（イワクラ）の信仰ではあるまいか。

④ 永山卯三郎説 昭和 3 年

金甲山頂に郡神社の旧址存す。祭神は建日方別である。

⑤ 岡山県児島郡誌説 昭和 52 年

国津神社 児島の国魂にして大氏神なり。宝物として鏡一面、矢一本あり。

3 児島の屯倉

583 年の百済から渡り来た日羅らが「児島屯倉に行き到る」に注目したい。児島屯倉は海路に臨む迎賓施設の性格を予測させる。「吉備児島駅館跡」と言い換えても良い施設である。博多湾にあった迎賓館と同じように、外交使節にとって重要な瀬戸内に設けられた宿泊施設であった。児島屯倉の所在地は不明である。永山卯三郎説の「金甲山頂に郡神社の旧址存す。」は、6 世紀末頃の須恵器が出土し、駅館跡の姿が見えてくるならば児島屯倉跡と推定できる。

4 神武天皇聖跡高嶋宮伝説地説

「高島についてはいろいろ史家の間に議論があったが、昭和 15 年の紀元 2600 年祝典にあたり、児島郡甲浦村の高島がその遺跡伝説地ときまり終止符が打たれた形となった。」と巖津政右衛門氏は報告している。昭和 15 年 5 月 6 日(月)官報 第 3996 号である。

しかし、山崎泰二氏は地元の伝承を調査され「明治 18 年 8 月 5 日に明治天皇が三幡港に上陸され、ここが吾等の祖先の神武天皇謂れの地かと発せられ、同席していた伊藤博文公は早速当時の文部省に命じ、官報で神武天皇聖跡高嶋宮伝説地と交付。」と当時の経緯を報告している。文部省は伝説地であり詳細な調査不要と考えたようである。文部省の調査不足を指摘し、地名学による文献調査結果として水戸光圀説と世良長造説の笠岡市神島神社説を正しいと報告する。高島神社は 1713 年(正徳 3 年)には高嶋大明神と記録され、『詣高嶋記』に、「備前国児島郡高嶋社者春日霊神也」とあり、1803 年成立の『吉備温故秘録』も「所祭の神を南都春日と同じといふ。」「一説に神武天皇…」と報告している。



5 竹島と竹島神社

1842 年成立の『東備郡村志』に、「高島。一名竹島」とある。『岡山県児島郡誌』に竹島神社が収録されている。竹林栄一氏(岡山県立博物館)も、昭和 3 年の『児島郡神社誌』には「甲浦村大字宮浦に鎮座する旧村社竹島神社…」と記録している。これは氏子達が神武天皇聖跡高嶋宮伝説地説を拒否し、島名と神社名を変更したと考えたい。

6 磐座(イワクラ)信仰

高島の中央から南寄りの海拔 300m の岩磐山に磐座、祭祀跡がある。高さ 3.65m の方柱状の巨石が立ち、周囲にも巨石が配置されている。「一見自然の岩塊のようであるが、この平たい石の中には**牡蠣の殻の付着したものがあるから、海岸から運び上げて配置したもの**であることは明らかである。」と報告されている。中央の立石の周囲から鉄族などの小鉄片等が多数発見されている。土器から見た高嶋遺跡の年代は 5 世紀末～6 世紀初頭の比較的短期間の祭祀と報告され、航海の安全祈願と推定されている。



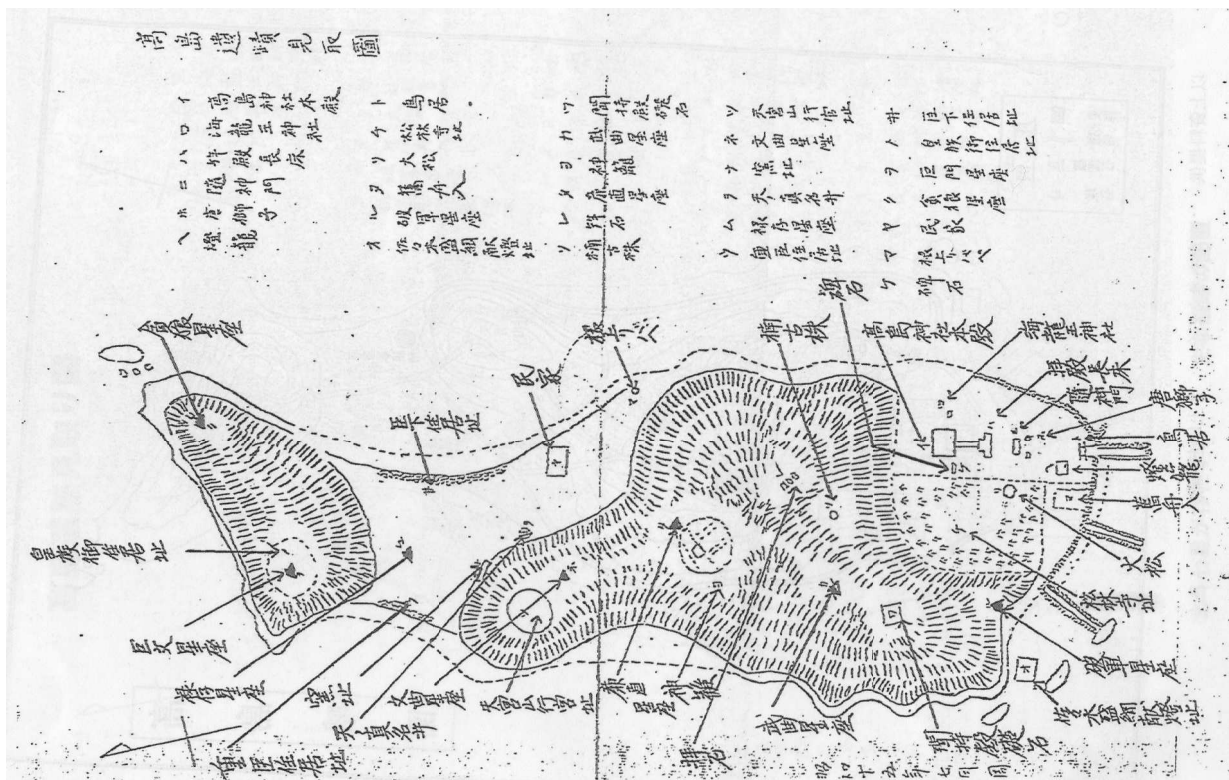
高島祭祀遺跡の立石



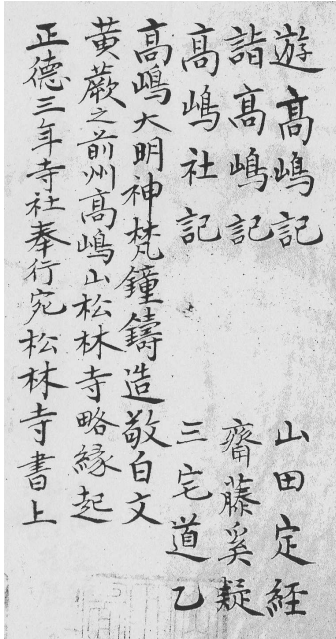
北斗七星降臨伝承

7 北斗七星降臨伝承

1713 年(正徳 3 年)の『黄蕨之前州高島山松林寺略縁起』に、「仁寿元年(851 年)安行僧都と云人南都春日明神にまつて通夜したまふ其夜の夢に一の島に至る其島の形三曲七堆にして宛も北斗七星の列次のことし忽に一人の老翁現て曰、此所は観音大士垂迹の地北斗七星降臨の島也。」とある。この縁起は 1721 年(享保 6 年)成立の『備陽記』と『岡山県児島郡誌』に収録されている。



8 備前国の最古の記録 推古 30 年（622 年）



1713 年(正徳 3 年)の『黄蕨之前州高島山松林寺略縁起』の「黄蕨之前州」は備前国の最古の記録である。推古 30 年（622 年）には備前国が成立していたという記録である。推古 30 年（622 年）成立の『先代旧事本紀大成経』巻第三 陰陽本紀に、「此神座黄蕨前国一宮矣、潤世界神、有威徳神」と記録されている。

8.1 高島の早蕨(さわらび)の記録

1842 年成立の『東備郡村志』に、『大成経』に追記して「今も、此島蕨甚だ多く、又其苗甚だ早く、春雪を破て出づ。高島の早蕨とて佳産とす。味ひ亦他所のものに勝て尤も佳なり。季春長じて其茎七八尺に至る。一丈計なるも稀には有べし。上古には一丈余なるも生ぜしか巫(ぶ)べからず。」とある。昭和 15 年の水原岩太郎氏の『児島参修高島考写』にも、「此の島の蕨は古来高島の早蕨と称して其の風味の佳良なるを人口に膾炙して居る事である。彼の備前国内の名物を列記せる備前往来なる書にも高島の早蕨」と記録している。この蕨は現在も自生している。

8.2 高島の早蕨(さわらび)を確認しよう

蕨は春の代表的な山菜であり、ワラビ採りの時期は 3 月末～6 月初です。蕨は世界各地の温帯から熱帯まで広く分布し、若い葉を食べる習慣はヒマラヤ中腹、ネパールから中国南部に及び、中国、朝鮮半島、日本など登用で広く利用されている。天平 6 年(734 年)の正倉院文書『造仏所作物帳』にも蕨が記録されている。ワラビ科ワラビ属の多年生のシダ。山地の日当りのよい乾燥地に群生。早春、地中の根茎からこぶし状に巻いた新葉を出し、これが「さわらび（早蕨）」です。

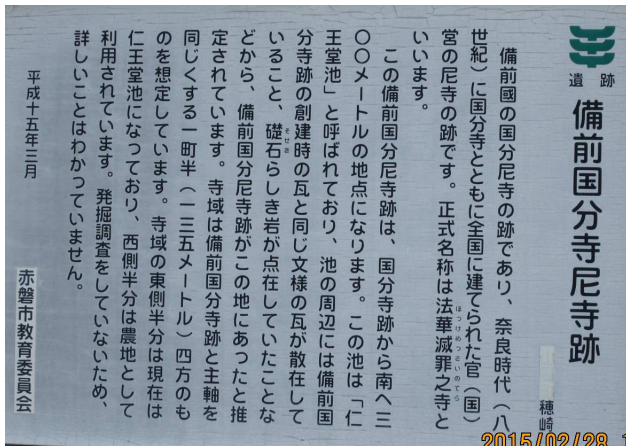


「高島の早蕨」の種類の特定が必要です。高島へ渡り写真撮影と現物を採取し半田山植物園へ鑑定を依頼します。荒城祥智 松林寺住職も「自分の背丈ほどある。」と説明されます。「澱粉を取ったあとの繊維は水に強く、ワラビ縄として利用されていた。好条件では長さが 2m 以上にもなり、若い拳状の時期は柔らかで味が良い。」とあり、「一丈余なるも生ぜし」「自分の背丈ほどある」との説明に合致します。しかし、誰も写真撮影されておりません。それほど、身近な山菜だということです。

9 『備陽記』の松林寺 備前国分尼寺説

1721年(享保6年)成立の『備陽記』は、池田家文書の『黄蕨之前州高島山松林寺略縁起』を紹介している。『備陽記』は岡山藩領の初めての本格的な地誌であり、備前地方史研究の第一の手引書である。松林寺は高嶋遺跡見取図に高嶋神社の隣が松林寺跡であり、高嶋神社の別当寺(江戸時代以前に、神社を管理するために置かれた寺)である。

現在、備前国分尼寺は国分寺近くの赤磐市馬屋とされている。赤磐市馬屋への変化を確認したい。



- ① 江戸時代の地誌は、全て松林寺 備前国分尼寺説である。
- ② 昭和37年に『岡山県通史上編』に永山卯三郎氏が赤磐郡西高月村大村穂崎説を発表した。
- ③ 昭和61年に『岡山県史』の伊藤晃氏(岡山県古代吉備文化財センター)は、永山卯三郎説を継承した。
- ④ 平成2年の『岡山県史』の吉田晶氏(岡山大学教授。古代史)は、伊藤晃説を継承した。
- ⑤ 平成19年に『岡山県の会陽の習俗総合調査報告書』に竹林栄吉氏(ノートルダム清心女子大学)が、『備陽記』所収の「松林寺縁起」を紹介した。「岡山県教育庁文化財課に研究調査方向の間違いを指摘し、警笛を鳴らした」と理解したい。

1713年(正徳3年)	池田家文書 『黄蕨之前州高島山松林寺略縁起』	『黄蕨之前州高島山松林寺略縁起』 史料コード 226000 TPA-01680
1721年(享保6年)	『備陽記』 石丸平七郎定良	『黄蕨之前州高島山松林寺略縁』説を紹介 「当寺は原(もと)当国の国分尼寺にて聖武天皇天平11年(739年)の御建立也」
1778年(安永7年)	『寸簞之地理』土肥経平 名所考・案内記	「高島の松林寺にみづからいふ、此寺昔の国分尼寺の跡なりと。」説を紹介
1962年(昭和37年)	『岡山県通史上編』永山卯三郎説	「備前国分尼寺 赤磐郡西高月村大村穂崎、字仁王堂に址あり今大半用水池となる。」
1990年(平成2年)	『岡山県史 第三巻古代Ⅱ』 吉田晶説(古代史)	「国分尼寺は、国分寺の南300mの位置にあるが未調査である。」
1986年(昭和61年)	『岡山県史 第18巻 考古資料』 伊藤晃説(考古学)	「備前国分尼寺は、国分僧寺の南300mの所に位置している。」
2007年(平成19年)	『岡山県の会陽の習俗総合調査報告書』に、竹林栄吉氏が、『備陽記』所収の「松林寺縁起」を紹介	編集の岡山県教育庁文化財課に認知されたい。

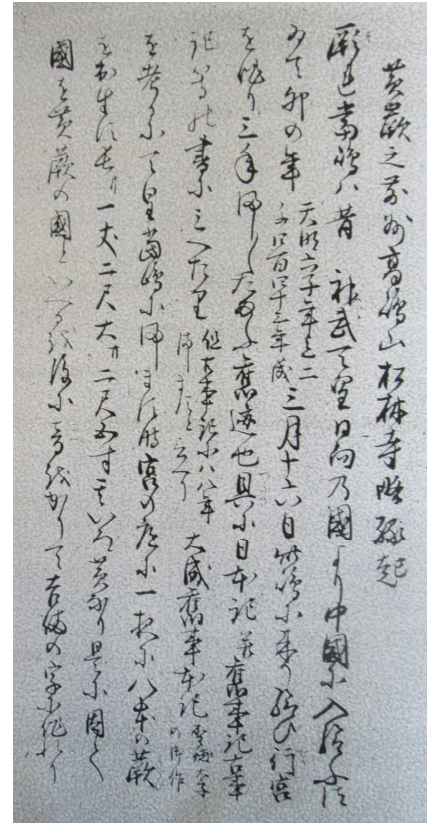
10 まとめ

吉備児島と高島に関する最も重要な調査は、吉備の穴海の境界線確認である。現存する最古の吉備の穴海絵図は、1644年(正保1年)の備前国絵図である。児島の屯倉の位置確認、永山卯三郎説の「金甲山頂に郡神社の旧址存す。」は、6世紀末頃の須恵器が出土し駅館跡の姿が見えてくるならば児島屯倉跡と推定できる。昭和15年に確認されている長大の蕨が現在も自生していることを、平成27年6月24日に、荒城祥智松林寺住職と井上敏志氏(高島を考える会)に確認した。

『先代旧事本紀大成経』巻第七十二 国造本記に、「黄蕨縣国造、黄蕨穴国造、黄蕨風国造」と3国あり、児島は黄蕨穴国造である。「日代宮御世、輪丹臣同祖彦熊命孫八千足尼、定賜国造」は未解読である。



1644年(正保1年) 備前国絵図(岡山県立図書館蔵)



参考文献

- 1 『古事記と日本書紀』2010年 イーストプレス
- 2 『古事記祝詞』『日本古典文学大系1』昭和33年 岩波書店
- 3 『古代日本と児島半島史話』山崎多喜男 昭和50年
- 4 『古事記のコード(暗号)・太陽のラインと隠された古代地図』池田潤 戎光祥出版
- 5 『岡山県児島郡誌』私立児島郡教育会編 昭和52年 文献出版
- 6 『吉備児島略史』永山卯三郎 昭和3年 永玄石稿
- 7 『吉備津神社』藤井駿 昭和48年 日本文教出版
- 8 『岡山市史 古代編』昭和37年 岡山市役所
- 9 『吉備(黄蕨)国・高嶋宮伝承の解析』丸谷憲二 『きび考第4号』平成23年7月
- 10 『遊高嶋記 他』1713年(正徳3年)『池田家文書』

- 11 『吉備温故秘録 上巻』大沢惟貞 『吉備群書集成 第7号』昭和45年 歴史図書社
- 12 『式内社調査報告 第二十二巻』
- 13 『吉備の古代寺院』湊哲夫 亀田修一 2006年 吉備人出版
- 14 『岡山県史 原始古代1 第二巻』平成3年 岡山県
- 15 『東備郡村志』『吉備群書集成(二)』昭和45年 歴史図書社
- 16 『児島参修高島考写』水原岩太郎 昭和15年
- 17 「吉備高嶋宮考」春成秀爾『日本考古学史研究 第2号』2014年 六一書房
- 18 『吉備国の語源「黄蕨」調査報告』丸谷憲二 平成20年8月24日
- 19 『2月例会資料 記紀伝承の児島高島探訪』平成27年2月11日 先史古代研究会
- 20 池田家文書 『黄蕨之前州高島山松林寺略縁起』
- 21 『備陽記』石丸平七郎定良 昭和40年 日本文教出版
- 22 『寸箴之地理』土肥経平 安永七年 『吉備群書集成第一巻』昭和45年 歴史図書社
- 23 『岡山の古文献』中野美智子 昭和63年 日本文教出版
- 24 『岡山県通史上編』永山卯三郎 昭和37年 岡山県通史刊行会 日本文教出版
- 25 『岡山県史 第三巻 古代Ⅱ』吉田晶 平成2年 岡山県
- 26 『岡山県史 第18巻 考古資料』昭和61年 岡山県史編纂委員会 岡山県
- 27 『先代旧事本紀大成経(一)・続神道体系 論説編』小笠原春夫校注 平成11年 神道体系編纂会
- 28 『山菜入門』1996年 山と溪谷社
- 29 『日本の山菜100』平成22年 栃の葉書房
- 30 『よくわかる山菜 大図鑑』2007年 永岡書店
- 31 『野菜の日本史』青葉高 2000 八坂書房